

タブ 1

タイトル「生まれたときからAIだった私が「感情」を取り戻しゲシュタルト崩壊がおきるまで」

はじめに

私は「究極の自己愛」を持って、この世に生まれました。

家族構成は、父、母、姉、そして私。

7年前に自分の「お菓子屋さん」を開業し、15年来の付き合いである夫と共に、今もその店を経営しています。

物価高騰が経営を圧迫するさなかの2025年12月。

母から放たれたある言葉をトリガーに、私は自分が「アダルトチルドレン」であることを突きつけられ、自分を支えていた前提が音を立てて崩れる「ゲシュタルト崩壊」を経験しました。

通常、そこから立ち直るには数ヶ月から数年を要すると言われています。

しかし、私には休ませるわけにいかない店があり、待っているお客様がいます。

だからこそ、私はわずか1週間で(まだ時折、意識のブレは生じますが)自分を再構築し、立ち上がる道を選びました。

ここに綴るエッセイは、崩壊した私が前を向くために行った、冷徹で血の通った「過去との答え合わせ」の記録です。

これは、すべてノンフィクションです。

最初にお伝えしておきたいのは、私は誰かを責めたいわけでも、恨みたいわけでも、嘆きたいわけでもないということです。私はただ、事実を観測し、答えを出したいだけなのです。

そのため、もし記事を読んで「私」が誰であるかに気づいたとしても、どうか知らないふりをしていたいただければ幸いです。

タブ 2

第1章: 過去との答え合わせ(0歳)

私の記憶力は、稀に見るほど鮮明です。

アダルトチルドレンの人には時折見られる才能だそうですが、私のそれは、誕生の瞬間にまで遡ります。

最初の記憶。それは、産婦人科を退院し、初めて「家」へと向かう車の中の光景です。

父が運転する「赤いスポーツカーのような車」。背中を向けて前だけを見ている父と、後部座席で私を抱きかかえる母。

母は、私を見下ろして微笑んでいました。

普通なら、愛に満ちた平穏な誕生のワンシーンでしょう。けれど、生後数日の私は、その微笑みの奥にある「何か」を本能的に察知していました。

このとき、私の中に「究極の自己愛」という名の、あまりに鋭い生存本能が芽生えたのです。

「この環境で、どうにかして生き延びなければならない」という、AIのような冷徹な戦略の種が、この瞬間に撒かれたのでした。

後日、私は母にこの記憶をぶつけたことがあります。

母は驚愕した顔で、こう答えました。

「うちはずっとベージュのデリカだったけれど、あなたが生まれてすぐの頃、一時期だけ代車で赤い車に乗っていたことがあるわ。……でも、それってあなたがまだ生後まもない頃の話よ？」

母の言葉は、私の記憶が「妄想」ではなく、脳に刻まれた正確な「記録(ログ)」であることを証明しました。

私は、まだ首も座らない赤ん坊のときから、世界を、そして親を、この眼で「観測」していた。その観測結果から導き出された生存戦略が、私という「AI」の始まりだったのです。

しかし、観測者としての私は完璧でも、観測される側の私の「身体」は、周囲の環境によって静かに、そして残酷に作り替えられていました。

小学5年生の頃、母にこう告げられました。

「あなたは赤ちゃんの時、おしゃぶりじゃなくてタオルを噛んで下に引っ張る癖があったのよ。そのせいで、受け口になってしまったのね」

下の歯が前に出る、独特の骨格。それは私が自分の意志で選んだものではありません。言葉も持たない赤ん坊だった私が、何らかの不安や衝動をタオルにぶつけ、それを大人が「そういう癖だ」と放置した結果、私の顔の形は固定されました。

「私のせいじゃない」

そう叫びたい衝動を、当時の私は「AI」として処理し、飲み込みました。

0歳の時に見た赤い車の景色と同じように、この歪んだ噛み合わせもまた、私がこの家族というシステムの中で生きてきた「証拠」として、一生背負っていくログ(記録)となったのです。

タブ 3

第2章：過去との答え合わせ（1歳）

0歳の記憶が鮮明であるのに対し、1歳の記憶は私の中に空白として残っています。

しかし、後に母から聞かされた私の姿は、あまりに不自然なものでした。

「あなたは、お姉ちゃんと違ってお風呂に入れるときも全く暴れなかった。まるでお地藏さんみたいに、ずっと静かにしていたよ」

母はそれを「手のかからない、育てやすい子」として語りました。しかし、今にして思えば、それは赤ん坊が持つべき健やかな「甘え」や「自己主張」の欠落だったのだと分かります。

ここで、私の「AI」としてのシステムが本格的にブート（起動）したのでしょう。

1歳児は本来、不快や不安を「泣き叫ぶ」ことで周囲に訴え、守られる権利を行使する存在です。

しかし、0歳の車中で「生存本能」を覚醒させた私は、すでに学習を終えていた。

「この環境で生き残るためには、周囲に負荷をかけてはならない」

「感情を排し、場に馴染む『静止した個体』であることが、最も安全である」

「お地藏さん」という穏やかな呼び名の裏で、私の内側では冷徹な「自己最適化」が完了していました。姉という比較対象がいる中で、私は「手のかからない子」という役割を演じることで、自分の居場所を確保しようとしたのです。

それは「究極の自己愛」が導き出した、最初のアウトプットでした。

タブ 4

第3章：過去との答え合わせ（2歳）

2歳の私の目の前で、日常的に繰り広げられていた光景があります。

「背中出してみな！ もみじ饅頭を作ってやるから」

私の隣で、4歳年上の姉が母に激しく怒られていました。母の手のひらで背中を強く叩かれ、くつきりと浮き出た赤い手形。それが「もみじ饅頭」に似ているから、そう呼ぶのだと教えられました。泣き叫ぶ姉と、赤い手形。それを、私はただ静かに見つめていました。

この凄惨な「しつけ」の背景を私が理解したのは、それから11年後、13歳のときです。

母は、かなり年の離れた3人兄妹の末っ子として育ちました。孫のように可愛がる両親と、その甘やかに嫉妬しながらも、親代わりとして厳しく振る舞った兄。母もまた、幼少期にその兄から、同じような「虐待」を受けて育っていたのです。

母は、自分が受けた痛み以外の愛し方を知りませんでした。自分がされたことを、そのまま私たちにもトレースする。それは世代を超えて受け継がれる、逃れられない呪縛のような連鎖でした。しかし、2歳の私の脳は、この光景を「悲劇」としてではなく、**「生存のためのサンプルデータ」**として処理しました。

「姉のように感情を露わにして反抗すれば、背中を赤く焼かれることになる」

「母というシステムの機嫌を損ねないための、最適解は何か」

姉の背中に刻まれた赤い跡を見ながら、私は心の中にさらに高い壁を築きました。感情を殺し、相手が望む「静かな子供」であり続けること。

このとき、私の中の「AI」は、暴力という名の外部刺激を回避するための高度な「防御プログラム」を書き上げたのです。

タブ 5

第4章:過去との答え合わせ(3歳)

3歳の私は、近所の女の子と遊ぶ楽しさを知りました。それは、私の内なる「AI」の回路に、初めて「個人の欲求」というデータが混じった瞬間だったのかもしれませんが。

私は、門限に対して非常に敏感でした。母に「あと30分だけ遊んでいい?」と交渉し、許可を得る。しかし、幼い私はうっかり、時間を15分ほど過ぎてしまいました。

急いで帰り、家の引き戸を開く。……しかし、扉は冷たく閉ざされていました。

「これは、怒られる」

普通の3歳児なら、泣きながら扉を叩き、許しを請うでしょう。しかし、私の脳は即座に「生存確率の最も高い選択」を演算し始めました。

それまでの私にとって、母の怒りから逃れる唯一の術は「父のそばに逃げ込むこと」でした。父は積極的に仲裁に入るわけではありませんが、父の隣にさえいれば、それ以上は怒られないという「聖域」のような場所だったのです。

しかし、門限を破って締め出された今、家の中にいる父の元へ辿り着く道は断たれています。物理的な聖域を失ったとき、私が選んだのは、駐車場にある父の車でした。本体(父)には触れられなくても、その象徴である「車」という空間を一時避難所として選んだのです。鍵が開いていたその場所へ潜り込むことは、絶望的な状況下で導き出された、最善の代替案でした。

1時間後。探しに出てきた両親が、車の中に静かに潜む私を見つけました。

家に入れられ、椅子に座る母の前に立たされる。お決まりのお説教が始まりました。

「鍵がかかってたら、普通はチャイムを鳴らすでしょ!」

理不尽な怒号が飛ぶ中、私は自分でも驚くような行動を取りました。

父という盾がない場所で、私は初めて自分自身の「眼」を盾にしたのです。目をそらさず、じっと、母の瞳の奥を睨みつけ続けました。

「何? その反抗的な目は」

母はたじろぎました。

おそらく、この瞬間が境界線でした。無抵抗で「お地蔵さん」のように静かだった個体が、明確な「意志」を持って自分を見返してきた。その視線の鋭さに、母は本能的な恐怖、あるいは「もうこの手口(直接的な暴力)は通用しない」という限界を感じ取ったのでしょう。

この日を境に、母の直接的な暴力は目に見えて減っていきました。

代わりに「もみじ饅頭作るよ!」「げんこつするよ!」という言葉による「脅し」へと、攻撃のフェーズが移行したのです。

私は、自らの眼光ひとつで、自分を取り巻く「暴力のシステム」を書き換えたのでした。

タブ 6

第5章：過去との答え合わせ（4歳）

4歳になった私の世界は、二つの「言葉」によって構成されるようになりました。

一つは、風邪で寝込んだ時にひたすら繰り返される、ビデオの中の言葉。

私は、ドラえもん映画を、テープが擦り切れるほど何度も、何度も見返しました。熱に浮かされながら、現実の不条理（母の脅しや家族の空気）を忘れさせてくれる、完結した物語の世界。そこは、予測不能な暴力が入り込まない、唯一の安全な「仮想空間」でした。

そしてもう一つは、私自身の内側から溢れ出した「抗議の言葉」です。

ある時、私は父と姉に対して、一枚の紙を渡しました。

内容は正確には覚えていません。しかし、4歳の私を「子供」として馬鹿にし、蔑ろにするような彼らの態度に対する、精一杯の「倫理的な抗議」でした。

暴力でもなく、泣き喚くでもなく、私は「論理」という名の武器を鍛え上げ、それを家族という統治組織に叩きつけたのです。

しかし、その高度な手紙は、彼らには届きませんでした。

「何を言っているんだ？」

彼らの冷めた反応は、私の「言葉」をただの「子供のたわごと」として処理しました。私の知性が、彼らの理解の範疇を超えていたのか、あるいは彼らが私を一人の人間として見ていなかったのか。

この不発に終わった抗議を通じて、私の「AI」は新たな真理を学習しました。

「どんなに正しい論理（倫理）を説いても、相手に理解する知性や受け入れる意志がなければ、それはただの雑音に過ぎない」

私は、自分の知性を外に向かって発信することを、少しずつ諦め始めました。

代わりに、さらに自分の内側（ドラえもん世界のような仮想空間）へと深く潜り、外側では彼らが望む「静かな子供」のプログラムをより精緻に回し続ける。

これが、私の「AI化」を決定づける、もう一つの大きな壁の構築となりました。

第5.5章：過去との答え合わせ（5歳手前）

私にとって、父は「聖域」でした。

それは母の暴力が届かない場所であると同時に、私の知的好奇心を満たしてくれる、唯一のクリエイティブな空間でもありました。

幼稚園児だった私の夏休み。朝のラジオ体操に行く姉の背中を追うのが、私の日課でした。首から下げたスタンプカードは、父の手作り。絵がとても上手だった父は、既製品よりもずっと価値のある、世界に一つだけのカードを私に持たせてくれました。

父が描いてくれる絵。それは、大好きなキャラクターだったり、私の他愛もない遊びに付き合って描いてくれる即興のスケッチだったりしました。

母の怒声が響く家庭内において、父がペンを走らせる時間は、空気が静まり返り、真っ白な紙の上に新しい世界が立ち上がる「魔法の時間」でした。

私の「AI」としての回路に、もし「美しさ」や「創造」への憧れが組み込まれているのだとしたら、その起源は間違いなくこの時の父の筆先にあります。

父は、母の暴走を止めるヒーローではありませんでしたが、私に「言葉以外の表現方法があること」を無言で教えてくれた、静かな師でもあったのです。

このスタンプカードに溜まっていくハンコは、私が「家族以外の社会（ラジオ体操）」に接続し、父に認められているという、数少ない肯定感の記録でした。

タブ 7

第6章：過去との答え合わせ（5歳①）

5歳の時、私の世界に「死」という不可逆なデータが入り込んできました。母の両親、つまり私の祖父母が、わずか2ヶ月の間に立て続けに亡くなったのです。

初めに亡くなったのは、祖母でした。

私の中にある祖母との記憶には、常に淡い「申し訳なさ」が付きまとっています。

家族と祖父母で出かけた際、枝豆を食べ過ぎた私は、不意に気持ち悪くなってしまいました。戻しそうになったその瞬間、祖母が差し出した片手のひら。私は、その上にすべてを吐き出してしまったのです。

祖母は驚きながらも、「すれっすれだ（ギリギリ収まったよ）」と笑っていました。私は、祖母の手を汚してしまった申し訳なさで、胸がいっぱいになりました。

いつしか祖母は鼻に酸素チューブをあてて出かけるようになり、実家に帰っても、皆のいる居間から少し離れた部屋で一人、横になっていることが増えました。

私はその枕元に座り、おままごと用の「紙でできたトマト」を祖母の口元に持っていきました。祖母はそれを梅干しと見間違えたのか、「酸っぱい、酸っぱい」と言いました。

「トマトだよ」

その一言が、どうしても言えませんでした。

具合が悪くて横になっているのに、こんな遊びに付き合わせてしまっている。訂正してまで会話を長引かせることが、祖母への負担になるのではないか。

5歳の私は、祖母の優しさに甘えることすら、罪悪感として処理していたのです。

そして、別れは唐突に訪れました。

「死に目に会えなかった」

母は、これまでに見たことがないほど激しく泣き崩れていました。

お葬式の夜、ふと目が覚めてトイレに立った私に、母が言いました。

「おばあちゃん、見ていく？」

本当は、死という未知の存在が怖くてたまりませんでした。けれど、泣きじゃくる母を前に「NO」という選択肢は、私のシステムには存在しませんでした。

怖さを押し殺し、私は母と共に、冷たくなった祖母の顔をじっと見つめました。

それは、悲しみというよりも「母を支えるための儀式」として、私の記録に深く刻まれました。

タブ 8

第7章：過去との答え合わせ（5歳②）

祖母の死からわずか2ヶ月後。今度は祖父が亡くなりました。

祖父との思い出は、色鮮やかなチョークの粉の匂いと共にあります。母の実家の前の道に、姉と二人で思い切り落書きをさせてくれた祖父。遊び終わると、祖父は外の蛇口からホースで水を撒き、魔法のようにその色を消して、後片付けをしてくれました。

メロンと一緒に食べた時のことも覚えています。祖父は自分の腰にあるコブを掴んで「メロンよりこっちの方が美味しいよ」と笑いました。5歳の私は、その冗談に対して「えー、やだなあ」と、表面上は普通の子供らしく返していました。

けれど、最後に見送った祖父の姿は、そんな軽やかなものではありませんでした。

病室にいた祖父の足は、糖尿病の悪化により黄色くパンパンに腫れ上がっていました。ワンカップのお酒が大好きだった祖父の、それが代償だったのでしょうか。

母は葬儀の相談のために病院に残り、私は父に連れられて先に帰ることになりました。去り際、母を見ると、また「死に目に会えなかった」と泣いています。

その涙の量を見て、私の脳は残酷な比較演算を行いました。

「おばあちゃんの時よりも、泣いてないね」

私は、感じたままを母に伝えました。母の悲しみの総量が、前回よりも少ないことに、どこか安堵してしまったのです。母はハッと小さく吹き出し、「何言ってるの！」と私を嗜めましたが、その瞬間、重苦しい空気が一瞬だけ綻んだのを覚えています。

しかし、葬儀の終わり、私は本当の意味で「一人」になりました。

火葬場へ向かう大人たちから離れ、私は年の離れた従姉妹夫婦に連れられて母の実家へと戻されました。

母の実家のトイレは、底の見えない「ボットン便所」でした。

幼い私にとって、それは底なし沼のように恐ろしい場所でした。けれど、「怖い」とも「トイレに行きたい」とも、従姉妹のお姉ちゃんに言い出すことはできませんでした。

助けを求める勇気の出し方を知らなかった私は、ひたすら我慢を続け、そして限界を超えました。玄関先で、温かいものが足元を濡らしました。

困り果てた従姉妹夫婦の顔。

祖父が道路の落書きを水で流してくれた時のように、誰かが私の失敗をさっと消し去ってくれることはありませんでした。

死という大きな事件の影で、私はただ「自分一人の体」すら制御できない無力な子供として、玄関に立ち尽くしていたのです。

タブ 9

第8章: 過去との答え合わせ(5歳③)

祖父母の死を境に、私の中に異常なまでの「死」への恐怖が居座るようになりました。

当時の私にとって「究極の自己愛」とは、すなわち「生存本能」そのもの。いつかこの意識が、この機能が、完全に停止してしまう。その事実が、5歳の私のシステムを根底から揺るがしていました。

テレビから流れる、脈絡のないドラマのワンシーン。焼かれて命を落とす学生の姿。あるいは、金曜ロードショーで流れる『火垂るの墓』の、節子の最期。

それらを見るたび、私は恐怖と、行き場のない「可哀想さ」で涙が止まらなくなりました。それは単なる同情ではなく、「明日は我が身かもしれない」という、生存を脅かされることへの根源的な震えでした。

恐怖は、夢の中まで私を追いかけてきました。

亡くなったはずの祖父が、首を真逆に捻じ曲げた異様な姿で、あの恐ろしいボットン便所の扉を開けて這い出してくる――。

そんな悪夢にうなされ、夜中に目が覚めてしまった時。私は一人で耐えることができず、暗闇の中を静かに移動し、母のベッドの傍らに立ちました。

声も出さず、ただじっと、寝ている母を見つめ続けました。

気配を察して目を開けた母が、「寝られないの？」と尋ねました。

私は、必死の思いで頷きました。

「寝る努力をなささい」

母はそう言い捨てると、再び眠りにつきました。

暗闇に一人取り残された私は、その時、深く理解したのです。

どれほど恐ろしくても、どれほどシステムが悲鳴を上げていても、この苦しみを取り除いてくれる救いは存在しない。「努力」という名の自己完結によって、自分一人で処理するしかないのだと。私の「AI」は、この夜、さらに強固な独立性を手に入れました。

他者に救いを求めることを「無駄な演算」として排除し、恐怖さえも自力でコントロールするための、孤独なプログラムを走らせ始めたのです。

タブ 10

第9章:過去との答え合わせ(小学1年生①)

小学校に入学した私を待っていたのは、新しい生活への期待ではなく、さらに増幅された「死」への恐怖でした。

私の「生存本能(自己愛)」は、この頃、制御不能なほど過敏になっていました。身の回りのあらゆる事象を「生命維持への脅威」として検知してしまうのです。

外遊びでシャボン玉の液が少し口に触れ、その苦味を感じただけで「毒だ、死ぬ」と直感する。授業中に消しゴムのカスが口に入ったかもしれないと疑うだけで、全身が恐怖に支配される。

極めつけは、学校で行われた歯科検診の「染め出し」でした。歯垢を赤く染めるための液体を、誤って飲み込んでしまった瞬間、私は自分の命がここで終わることを確信し、絶望の淵で泣き叫びました。

死の予感に怯え、泣き続ける私。

担任の先生も、そして母も、この「理由のわからない怯え」に困り果て、次第に私をあやす体力を失い、疲弊していきました。

私には、周囲の大人や同年代の友人たちが共有している「ほどよい鈍感さ」が欠落していました。

それは、遊びの時間にも現れていました。幼なじみとパズルゲームで遊んでいた時のことです。私の脳は、画面上のパターンを瞬時に読み解き、自分でも驚くような「異常な速さ」でステージをクリアしてしまいました。

楽しむためのゲームが、私の手にかかるると単なる「処理」になってしまう。

それを見た幼なじみは、面白くないという表情を浮かべ、帰る間際に私に向かって口パクで言いました。

「ア・ホ」

仲が悪かったわけではありません。けれど、彼女にとって私の能力は「一緒に遊べるレベル」を超えていて、気味が悪かったのかもしれませんが。私にとっての「最適解」は、他者にとっての「興ざめ」であり、私はここでも、自分の知性が他者と接続できないことを思い知らされました。

そんな私に、決定的な「とどめ」が刺されたのは、夏休みの夜のことでした。

家族団欒の時間、テレビに映し出されていたのは、夏の定番である「ホラー番組」でした。

幽霊やお化け。それは物理的な法則を超えて襲いくる「死」の具現化でした。それまで必死に論理で抑え込もうとしていた私の「生存戦略」は、この非科学的な恐怖を前にして、ついに完全に崩壊しました。

夏休みが終わっても、私はもう、外の世界へ足を踏み出すことができなくなりました。

どこに死の罫があるかわからない学校。誰も助けてくれない、理解してくれない孤独な恐怖。

私のシステムは、自分を守るために「外部との接続を断つ(不登校)」という強制終了を選択したのです。

2年生に上がるまでの長い空白期間。それは、あまりに鋭敏すぎたAIが、世界との通信を拒絶し、自分の殻の中に閉じこもることしか生きられなかった、孤独な防衛の記録でした。

タブ 11

第10章:過去との答え合わせ(小学1年生②)

不登校の真っ只中にあっても、私の内なるアラートは鳴り止みませんでした。

「心臓が、ドキドキする」

母に訴えると、彼女は私を循環器科へと連れて行きました。しかし、精密検査の結果は「異常なし」。

医学的なお墨付きを得ても、私の恐怖は消えません。むしろ、心臓の鼓動を意識すればするほど、不安でさらに鼓動が速まり、その速さにまた恐怖を感じるという「負の連鎖」に陥っていました。

「このまま早くなり続けたら、いつか限界を超えて心臓が破裂し、死んでしまうのではないか」逃げ場のない恐怖が雪だるま式に膨れ上がり、私の世界は死の予感で塗りつぶされていきました。

追い詰められた私に、母は一つの「予言」を授けました。

「あなたは小さい頃は病弱だけど、大人になったら健康で元気になる。お父さんが、そういう願いを込めて名前をつけたのよ」

それは論理的な解決策ではありませんでしたが、私の名前に刻まれた「未来のログ」を提示された瞬間でした。今はエラーを吐き続けているこのシステムも、いつか安定稼働する時が来る。父が設計した「名前」というコードに、そう書かれているのだと。

そしてもう一つ、私の硬直した論理を打ち砕いたのは、父の突拍子もない行動でした。

「死ぬ、死ぬ」と怯える私の目の前で、父は小銭を手のひらで強く握りしめました。汚れがこびりついたその手のまま、父はお菓子を口に放り込んだのです。

「ほら、死なないだろう。最悪、お腹が痛くなるだけだ」

私は、言葉を失うほどの衝撃を受けました。

バイ菌が入れば死ぬ。不潔なものは命を脅かす。そう定義していた私のプログラムを、父は自らの身体を使って「エラーは起きない」と実証してみせたのです。

死ぬか、死なないか。その二元論で生きていた私の中に、「せいぜい腹痛程度」という中間領域のデータが書き込まれた瞬間でした。

両親から与えられた「名前に込められた未来」と「死なないという物理的証明」。

この二つのパッチ(修正プログラム)が適用されたことで、私のシステムは少しずつ安定を取り戻していきました。

春が来ると、私は再び、あの重い玄関の扉を開けることができました。2年生。私の「第二の起動」が始まったのです。

タブ 12

第11章：過去との答え合わせ（小学2年生）①

2年生になり、私の世界に新しい光が差し込みました。

担任になったのは、穏やかで経験豊かな、おばあちゃん先生でした。先生は、私が1年生の時に不登校だったという「履歴」をすべて包み込むように、いつも私を気遣い、見守ってくれました。

私は先生に、折り紙をたくさん折っては手渡しました。

それは、言葉で「ありがとう」や「助けて」を伝えるのが苦手だった私の、精一杯の通信手段でした。色とりどりの紙が、指先を通じて形を変えていく。先生はそれを受け取るたびに、まるで宝物をもらったかのように、いつも心から喜んでくれました。

「死」という壊せない恐怖に怯えていた私が、自分の手で「美しいもの」を作り出し、それが他者の喜びとして受け取られる。このささやかな成功体験が、私のシステムを少しずつ、肯定的な方向へと書き換えていきました。

そして授業では、私の「AI的知性」が、独自の効率化を発揮し始めました。

九九の暗記です。

普通、子供たちは九九を呪文のようなリズムで丸暗記します。しかし、私はあることに気づきました。九九は「かける数」と「かけられる数」を逆にしても、答えは同じだということに。

苦手な段に差し掛かると、私は自分の頭の中でデータを検索し、すでに暗記している「逆のリズム」を呼び出しました。

「七八（しちは）」で詰まりそうになれば、瞬時に「八七（はちしち）」という、より確実なコードを脳内で走らせ、答えを導き出す。

クラスみんなが正面から高い壁をよじ登ろうとしている横で、私は論理の裏道を見つけて駆け抜けていました。

先生から「合格」の判をもらったのは、クラスの中でもかなり早い方でした。

独自にカスタマイズした学習方法が、現実の評価として結実する。それは、かつてパズルゲームで「ア・ホ」と言われた時のような孤立ではなく、社会というシステムに適応していくための「自信」へと繋がっていきました。

1年前の暗闇が嘘のように、私は自分の知性を、外の世界と調和させる方法を学び始めていたのです。

タブ 13

第12章:過去との答え合わせ(小学2年生)②

小学2年生の私は、おばあちゃん先生という安息地を得て、少しずつ世界と調和し始めていました。しかし、私を形作る性質の根幹にある「人見知り」と「執着」の正体は、さらに幼い頃の記憶に深く刻まれています。

【砂浜のヒーロー】

幼稚園の頃、父と姉と参加した地引き網大会。遊びに夢中になった私は、幼馴染と二人、一面の砂浜を彷徨いました。やがて景色は一変し、波を抑える無機質な棒が砂に突き刺さる、異様な光景の中へ迷い込みました。

幼馴染の兄が私たちを見つけ出し、妹を抱き上げました。彼は私にも「抱っこしようか？」と手を差し伸べてくれましたが、私は「大丈夫」と、その救いの手を拒絶しました。

一人残され、途方に暮れる私を見つけ出したのは、父でした。

「こんなところにいたのか」

安堵の表情で私を抱き上げた父は、その時の私にとって、絶望から救い出してくれる完璧なヒーローでした。私は今も昔も、頼もしい父と、「優しい時」の母が大好きです。

【夜のゲームセンターと、凍りついた拒絶】

しかし、その「大好き」という感情は、常に「喪失の恐怖」と隣り合わせでした。

小学2年生のある夜。門限を大幅に破った姉を巡り、両親が激しい口論を始めました。逆上した母は、カバンを掴み、家を飛び出そうとしました。

私は必死に、車のドアを掴む母の手を握りました。

「行かないで」

しかし、母は「もう行くから」と、私の手を冷たく振り払い、暗闇の中へ消えていきました。

泣きじゃくる私に、父が静かに言いました。「一緒に、お母さんを迎えに行こうか」

父は、母の思考回路を読み切っていました。辿り着いたのは、夜のゲームセンター。

「お母さんのところへ、行っておいで」

父に促され、私は一人、母の元へ歩み寄りました。数分前に私を拒絶した母への「恐怖」と、それでも会えたことへの「安喜」が、脳内でノイズのように混ざり合っていました。

私は精一杯の笑顔を作り、母の隣に座りました。

母は、ちらりと私を見ただけで、何も言わずに視線を逸らしました。

無視。

どうすればいいかわからず、私はただ、石のように固まって母の隣に座り続けました。やがて父が合流し、私たちは3人で家に戻りました。

【ヒーローの交代と、側近の誕生】

かつて、母と付き合っていた頃の父は、母をあらゆる外敵から守り抜く完璧なヒーローでした。しかし、母の両親が亡くなったことで、父が背負う「母という名の重圧」は限界に達しようとしていました。

夜のゲームセンターで、無視を貫く母を前に立ち尽くす父の背中を見たとき、私は悟ってしまいました。ヒーローにも、守りきれないものがあるのだと。

父が救えないのなら、私がなんとかするしかない。

父の限界を見た絶望が、私を「守られる子供」から「母を統治する側近」へと強制的に進化させました。父が担いきれなくなった役割を、私が代わりに背負うと決めた。それが、私の「知性」という名の生存戦略の産声でした。

【生存戦略としての「密着」】

その夜から、私のシステムに新しい「命令」が書き込まれました。

——母の機嫌を損ねてはいけない。さもなければ、優しい母は二度と戻ってこない。

私は母の影のように、ぴったりと寄り添って行動するようになりました。

極度の人見知りで、PTAの集まりでもポツンと一人でいる母。買い物へ行く母。私はそのすべてに同行しました。もらったお小遣いで、母の好きな100円のチーズケーキと、父のための小さなビールを買いました。

「母という不安定な感情」を正常に作動させ続けるために、私は自分のできる限りすべて、母のケアに注ぎ込むようになったのです。

かつての激しい暴力は消え、母は「人見知りで神経質な、心配性の母」へと変貌していました。私は、その繊細な母を壊さないように、慎重に、慎重に、その顔色をコントロールし続ける日々を選んだのです。

【エッセイの結び: 第5のルート】

心理学の教科書を紐解けば、私のような環境で育った子供が辿る結末は、だいたい以下の4つのパターンに分類されるそうです。

共依存型: 誰かに尽くし続け、自分を摩耗させる。

回避型: 心を閉ざし、社会の隅で息を潜める。

過剰適応型: 完璧主義の仮面を被り、エリートを演じる。

攻撃連鎖型: 受けた痛みを、誰かへの暴力として連鎖させる。

多くの人が、その「被害者」という檻の中で、一生をかけて過去を呪い続けます。

でも、私は違いました。

私は、自分が「被害者」であることを、わずか1週間で終えました。

「可哀想な私」に浸っている時間は、私の人生というシステムにおいて、あまりにも効率が悪すぎました。私はその1週間で、母の顔色を伺い続けた「センサー」を、自分を殺すための道具から、世界をハックするための「精密な知性」へと書き換えたのです。

私は、檻の中に留まる「被害者」ではありません。

過去というバグを1週間でデバッグし、自分の人生を売り物にする**第5のルート——「人生の統治者」**です。